

博士(文学) 前田 しほ

学位論文題名

ワレーリヤ・ナールビコワ研究

ーロシア現代文学におけるポストモダニズムとフェミニズムの交差ー

学位論文内容の要旨

本論文は序、第1章―第6章、結語、図版、参考文献表によって構成されている。全体の分量はA4横書き 291 頁 (400 字詰め原稿用紙換算約 818 枚)、図版は 39 枚である。

本論文は、現代ロシアの女性作家ワレーリヤ・ナールビコワ (1958 年生まれ) の刊行された全散文作品を対象として、ナールビコワの文学の特徴について論じたものである。

作家ソローキンやペレーヴィンらに代表されるポストモダンの傾向の文学の優勢、およびペトルシェフスカヤ、トルスタヤ、マリーナなど多数の女性作家の活躍は、どちらも現代ロシア文学の顕著な特徴として挙げることができる。本論文では、1980 年代後半から 90 年代にかけて、高度な言語遊戯とラディカルなセクシュアリティを特徴とする難解な小説を意欲的に発表したナールビコワを、ポストモダン作家と女性作家という二重性においてとらえ、彼女の創作をロシア・ポストモダン文学と女性文学という二つのコンテクストにおいて位置づけようとしている。

ロシア・ポストモダン文学については、世界的ポストモダン文化の一ヴァリエーションとして捉えると同時に、ソヴィエト時代に遡って形成過程を考察し、ロシア的特性をさぐる方法を採用している。ロシア女性文学研究に関しては、クリステヴァ、シクスー、イリガライらによる新しい傾向のフェミニズム (ポスト・フェミニズム、もしくはポストモダン・フェミニズム) の観点を導入している。ポストモダニズムとフェミニズムを相互補完的に用いて、作家の言語観、作品における言語の機能、文体、構造、時空間、エロティシズム等に着目して、ナールビコワのテキストを詳細に分析している。

「序」で、本論がワレーリヤ・ナールビコワの創作をポストモダニズムとフェミニズムの交差する場において論じていこうとする試みであることが述べられ、全 6 章の構成と各章の目的が説明される。

第 1 章では、まず欧米における 1960 年代以降のポストモダンの文化現象について概説し、ポストモダニズムという概念について論じている。ハッサン、リオタール、ボードリヤールらの

著作を援用して、不確定性、権威への不信、シミュラクル等の基本概念を確認した後、ポストモダン文学の諸特徴（境界侵犯、異種混淆性、曖昧なアイデンティティ、不明確なプロット、時間軸の入れ替え、間テキスト性等）を論じる。次いで、ロシア・ポストモダニズムの特徴とその形成過程について考察する。ロシアのポストモダニズムが、基本的コンセプトにおいて欧米のポストモダニズムと共通することが明らかにされる。さらに、ソ連時代の非公認文化の一派（ソツ・アート、モスクワ・コンセプチュアリズム等）がポストモダン文学を生み出す文化的基盤となったこと、ペレストロイカ期に「もうひとつの散文」（チェプリーニン）と呼ばれた体制的でも反体制的でもない文学の一部が、ロシアに伝統的な文学中心主義への懐疑や間テキスト性などのポストモダニック特徴を示しており、90年代にポストモダン文学と呼ばれかえられていった過程が、エプシテインやグロイスらの論考をもとに論じられている。

第2章では、ナールビコワの作家としての経歴と作品について概説し、ナールビコワ作品をめぐるディスコースを詳細に検討している。セクシュアルな意味での過激さと実験的文体を特徴とするナールビコワの創作が、道徳的・文学的規範からの逸脱を示しているために、賞賛や驚嘆の他に当惑や嫌悪感を呼び起こしてきたことが確認される。ここで、女性と男性の関係を対立ではなく差異の概念でとらえなおす新しいフェミニズム——1980年代にフランスで生まれたポストモダン・フェミニズム——の観点を導入することによって、ナールビコワ作品の諸特徴をあらたに読み解く可能性が主張されている。

第3章以降では詳細なテキスト分析が行われている。第3章では、ナールビコワの豊かで鋭敏な言語感覚が指摘され、概念的な側面からその言語観が検証される。この作家は言語を単に意味伝達の機能において用いるのではなく、言語から意味の専制を取り払い、恣意的・表層的な「シニフィアンの戯れ」を強調して、言語の記号としての側面を重視する。語や節の過剰な反復・交換、一般的な文法規範からの逸脱を特徴とする文体が、ヴィトゲンシュタインの「言語ゲーム」という概念に通ずる要素を持つことが指摘される。

第4章も引き続きナールビコワの文体を論じ、反復的な文章構造と現代美術の美学との共通性が指摘される。作品内で言及されているイリヤ・カバコフやフェルナンデス・アルマンらのジャンク・アートと同様に、美しくないものを美的に再構成する美学がナールビコワには見られ、それが文体の反復構造にも反映している。反復行為の延長としての間テキスト的引用もここで分析される。

第5章は、ナールビコワのテキストが、豊かな身体感覚に基づいて作り上げられた身体的言語空間であることを論じている。主観的な身体感覚に依拠したナールビコワのテキストでは、現実が幻想・夢・思考の描写と交錯し、時間は過去・現在・未来にわたって錯綜し、空間もまた自由に移動して、時には文学・歴史的空間とまじりあう。こうした時間および空間の叙述は、複数のテキストが入り交じる間テキスト空間を形成する。ナールビコワにおいては、ロシア古典文学をはじめとする言語テキストのみならず、絵画、彫刻、建築、音楽までとりこんで多く

のジャンルにわたる壮大な知的遊戯の世界が構築されている。

第6章では、ナールビコワのテキストの「女性性」、「女性のエクリチュール」(シクスー)としての側面に焦点を当てている。ロシア女性が示してきたフェミニズム嫌悪には、従来のフェミニズムへの前向きな批判としての側面があることを指摘し、クリステヴァ、シクスー、イリガライらが提唱する新しい傾向のフェミニズムは、ロシア女性文学への批評理論として機能し得るという見解を示した。それに基づいてナールビコワのテキストのセクシュアリティを論じ、彼女の作品が女性性を刻み込んだという意味で「女性のエクリチュール」として認められること、また作品自体が間テキスト的フェミニズム批評として機能していることを指摘する。ナールビコワ作品では、種々の文学作品に表されてきた古典的女性像の組み替え、伝統的三角関係の構造的ずらしなどによって、男性的なセクシュアリティの体系の相対化が行われると同時に、語や文体がたやすく性を交換し、また両性具有性が示唆されるといった、刺激的な境界侵犯も行われている。

「結語」では、以上の各章の結論を簡潔にまとめている。また、フェミニズム理論を女性文学研究に自己分析的に用いたことを本論文の意義として挙げ、女性の他者性について検討して行く上で、本論文がひとつの実践的成果として有効に作用することへの期待が述べられている。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 望 月 恒 子

副 査 教 授 浦 井 康 男

副 査 教 授 望 月 哲 男

副 査 助 教 授 大 西 郁 夫

学 位 論 文 題 名

ワレーリヤ・ナールビコワ研究

－ロシア現代文学におけるポストモダニズムとフェミニズムの交差－

本審査委員会は、4回に渡る審議と口頭試問等を通じて、以下の点を確認した。

ポストモダンの傾向の文学および女性文学の優勢は、1980年代から今日に至る現代ロシア文学のめだった特徴となっている。本論文は、ポストモダンの傾向の明瞭な女性作家ナールビコワを取りあげ、ポストモダニズムとフェミニズムの観点から作品の詳細な分析を行い、この作家を現代ロシア文学、さらに現代文化の大きな流れの中で位置づけようとしている。本論文の成果として、第一に、ロシア・ポストモダニズムについて、20世紀後半の世界的ポストモダン文化のヴァリエーションとしてとらえた上で、社会主義を経験したロシアの歴史的特殊性を重視して形成過程を考察した点が挙げられる。ソヴィエト時代の非公認文化がポストモダン文学の文化的基盤となったこと、体制文学も反体制文学も共有していたハイパーモラリズムを排した新しい傾向の文学が、ポストモダン文学と読み替えられて行く過程が、広範囲にわたる先行研究を渉猟して論理的かつ実証的に叙述されている。

成果の第二は、ポストモダニズムやポスト構造主義との連動性を特徴とする新しい傾向のフェミニズムを、ロシア女性文学研究に積極的に適用したことである。二、三のすぐれた詩人（アフマトヴァ、ツヴェターエヴァなど）以外にめだった女性作家がいないとされてきたロシア文学に、ペレストロイカ以降に異変が生じ、それぞれに個性的な多くの女性作家がめざましい創作活動を見せている。従来のフェミニズム批評がこの顕著な現象の分析に必ずしも有効に作用してこなかった事情、ロシア女性作家のアンチ・フェミニズム的言説、1980年代、90年代に女性たちが自発的に発行した女性作家アンソロジー等に関する分析は的確であり、フェミニズムが本論文の概念的枠組みとして適切に生かされていることを示している。

第三に、これが最大の成果であるが、ナールビコワの作品について詳細なテキスト分析を行

い、彼女の創作の意義を明らかにした。ナールビコワ文学の属性を、ポストモダニズム的文学手法として見ると同時に、「女性のエクリチュール」の要素としてもパラレルに検討した。これによって、社会集団のコードに対しても男女の関係の枠に対しても、支配的構造を揺るがし、二項対置をずらし、価値や意味を相対化し、主体・客体関係を曖昧化し、多元性・多主観性をめざすという複合的な戦略が析出されている。難を言えば、ナールビコワにおける文学的女性性と彼女が生物学的・社会的に女性であることの区別を積極的に問題とする意識がやや弱い。フェミニズムの批評理論に拠る場合にはこの意識をもっと尖鋭に持つことが必要だと思われる。またナールビコワの詩と散文の言語比較といった補助的作業、伝記的・同時代史的研究など背景を補強する作業が軽視されている。これらは今後の課題として残されるが、上に挙げた本論文の成果を損なうものではないと考えられる。個々の作家の分析を積み重ねることによって、難解で定義しにくいロシア・ポストモダン文学の全体像をより明らかにしていくために、本論文が提供した、ポストモダニズムとフェミニズムのコンテクストにおけるナールビコワ理解は、非常に大きな意義を持つことになる。

以上の成果に鑑み、当審査委員会は全員一致で、前田しほ氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるという結論に達した。